

不思議な箔検電器

下図のように箔検電器のコルク表面を汚すと不思議な挙動を示すようになります。

天板に負に帯電させた塩ビ棒を接触させてから塩ビ棒を離れた後、手で触ると、普通は箔が閉じてしまいますが、下図のような箔検電器では全体が正に帯電して開いたままになってしまいます。

墨汁を染み込ませてから乾燥させた「ちり紙」を引き裂いたときにできる繊維を放電隙間の中に入れておくと、手で触らなくても全体が正に帯電して開いたままになってしまいます。

負に帯電した塩ビ棒を接触させたにもかかわらず、正に帯電してしまうとは、不思議な現象ですね。

この箔検電器の構造は浮遊電極が存在する[フラッシュメモリ](#)（USBメモリ）に似ています。

コルク部分やガラス表面が「カビ」などで汚れている古い箔検電器が不思議な動きをする場合があります。

どなたか研究してみませんか。

